様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2005～2008
課題番号：17320111
研究課題名（和文）　墓より見た中国宋代の社会構造

研究課題名（英文）　The Chinese Social Structure in Song dynasty --from the viewpoint of graves

研究代表者　平田　茂樹（HIRATA　SHIGEKI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号　90228784

研究成果の概要：
「墓」をキーワードに用いながら宋代社会の構造について多面的に研究を行った。研究成果としては、（１）墓誌銘、行状、神道碑といった史料の特徴の解析、（２）上記の史料もしくは「墓」そのものがどのようなプロセス並びに社会的背景を以て作られたかについての解析、（３）「墓」資料を通して窺える人的ネットワークの解析を行った。その結果、中国社会は地縁、血縁、学縁、業縁といった多様な「縁」をもとづくネットワークによって構成されるといわれているが、宋代の「墓」資料はまさにこうした多様な「縁」を解き明かす上で格好なものであり、「墓」関係資料の解析を通じて、唐代から北宋、北宋から南宋へ社会が次第に「地方化」を強めるとともに、士大夫から庶民に至るまでの広範な文化を創り上げていく様子を確認することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	4,100,000	0	4,100,000
２００６年度	2,100,000	0	2,100,000
２００７年度	2,500,000	750,000	3,250,000
２００８年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
総　計	11,500,000	1,590,000	13,090,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：墓　墓誌銘　行状　神道碑　地方化　士大夫　列女

１．研究開始当初の背景

(1)本研究を着想し、また構想するに至った直接的な背景は、研究代表者並びに連携研究者５名の研究メンバーのうち平田・遠藤・岡・須江が２０００年の夏にカナダのモントリオールで開かれた「アジア・北アフリカ研究国際会議」（通称 ICANAS）、およびアメリカのハーバード大学で開かれたシンポジウム「Middle-Period Chinese History and Its Future」、UCLA で開かれたワークショップ

「Recent Development of Song Studies in Japan」に出席し、報告する機会を得たことにある。ここで交わされた議論の中で我々が強く感じたのは、欧米の研究者との研究視点の大きな差異であった。すなわち、日本の研究者にとって、唐代から宋代において政治、社会、経済、文化上の大きな変革があったとされる唐宋変革論が通説となっているが、欧米の学界においては寧ろ北宋から南宋への移行期、並びに南宋から明末までの連続性が問題とされている。また、これまでは士大夫を中心としたエリート文化に研究の重点が置かれてきたが、近年、外国においてはいわゆる民衆文化への視座が高まってきている。従って、我々日本の研究者にとって、今後の大きな課題は従来の唐宋変革論とは異なる「時代区分」の見直しの問題であり、また宋代士大夫文化研究に過度に比重が向きすぎている研究状況を如何に修正し、広範な階層をも含み込んだ社会文化史研究の方法論の構築である、と認識を新たにした。

(2)平田以下のメンバーに、中島楽章を加え、基盤研究（B）「宋代以降の中国における集団とコミュニケーション」(岡元司代表、2002～2004 年度）において共同研究を進め、宋代社会のネットワークについて多角的な研究を進めた。その成果は後に本研究の成果をも踏まえ、『宋代社会の空間とコミュニケーション』（汲古書院、2005 年）として結実することとなる。ただ、この共同研究の進行過程で、今後の課題として浮かび上がってきたのは、通常の史料を用いる限りエリート文化研究に陥ることとなる。従って、如何に当時の広範な人々を含み込んだ社会の実像を明らかにしえる史料を探しだし、如何に分析するかという課題であった。

(3)この問題を見直す上で大きな転機となったのは岡、平田、遠藤が始めつつあった墓誌銘研究、ならびに須江が取り組みつつあった石刻資料研究であり、こうした史料を用いることを通じて新たな方向性を見いだすことができるのではないかという共通の思いに至った。さらに、平田が 2003 年に台湾・東呉大学で開かれた「宋代墓誌銘」に関する国際学会に参加し、海外の研究者の当該分野における研究を実見する機会を持ったことも着想上の一因となった。この国際学会を通じて得た人脈は今回の共同研究の上でも海外研究協力者として参加してもらっている。

(4)以上の経緯のもとに、平田を研究代表者とし、連携研究者として遠藤、岡、須江、中島の合計５名を中心に、多くの内外研究者に協力頂く形で、社会の深奥を窺うことができる「墓」関係資料を駆使し、新たな宋代社会構造の実像を獲得すべく本研究を着想した次第である。

２．研究の目的

本研究は、「墓」を共通の素材として、宋代の社会的結合の特色とその変化を、唐・北宋交代期、北宋・南宋交代期を射程に入れて分析することを目的としている。具体的には、（１）官僚ないしはエリートが、彼ら相互にどのような交流を行い、そこからいかにして政治グループが形成されていったか、（２）そうした官僚・エリートたちが地域社会において依拠していた家族・宗族は、唐宋交代期、北宋・南宋交代期にかけてどのような変化を見せたか、（３）他方で、エリート層は科挙を基軸として再生産される儒教的教養人としての性格を持つ。彼らが学問、文化、信仰、趣味といったものを契機としていかなる人間的繋がりを形成していたか、非エリート層のとの交流をも射程に入れつつ、広範な社会的ネットワークを明らかにする、という３つの側面から当該課題にアプローチする。

３．研究の方法

（１）研究代表者ならびに連携研究者は個別に研究を進める一方、大阪市立大学を拠点として、毎月一度、内外の研究者を招き、研究成果について議論を重ね、上記研究目的の課題について検討を積み重ねる。なお、研究代表者、連携協力者、海外研究協力者の研究分担は以下の通りである。

【研究代表者】

平田茂樹：研究の総括と宋代政治的ネットワーク分析

【連携研究者】

岡　元司：宋代地域社会ネットワーク分析

須江　隆：宋代宗教ネットワーク分析

遠藤隆俊：宋代家族・宗族ネットワーク分析

中島楽章：宋元代民衆ネットワーク分析

【海外研究協力者】

鄧小南：宋代石刻資料の特質の分析

劉静貞：宋代墓誌資料の特質の分析

廖咸恵：宋代の士大夫と風水師・地理師の交流関係の分析

Beverly Bossler：宋代の節婦・義女関係史料の分析

翁育瑄：唐宋墓碑関係史料の内容の差異の分析

（２）「墓」関係資料は文献資料に偏る傾向を有するため、現地に出向き調査を行う。具体的な調査地点としては、洛陽、蘇州、杭州、寧波、泉州、広州など地域の墓並びに石刻資料の調査を進める。

（３）（１）、（２）の成果について学術雑誌に成果を逐次、公表する。

４．研究成果

「墓」をキーワードに用いながら宋代社会の構造について多面的に研究を行った。研究成果として、第一に、墓誌銘、行状、神道碑といった「墓」関係史料の特徴の解析を行った。墓誌銘については、海外研究協力者の鄧小南、劉静貞、翁育瑄、神道碑については榎並岳史に多大な協力をいただき、また、石刻資料全般の問題については連携研究者の須江隆を中心として、これらの史料の形態、作成過程、史料上の有効性について討論を重ねた。この中で、石碑そのものと墓誌銘、神道碑等を記載した文集、地方志所載の二次的文献資料との差異（具体的には石碑と文献資料の間には、記述の差異がある。これは執筆者と依頼者の思惑の差異によって、埋葬時や設置時に内容が曲筆されることが多い）、ならびに文献資料には記載されない石碑の形態や装飾の重要性が指摘され、改めて現物の資料と二次的文献資料との相互調査の必要性が明らかとなった。また、調査を進める内に家族間の墓誌銘、行状、神道碑における記述の差異を発見し、個人の伝記研究においては、当該人物の「墓」関係資料の相互比較のみならず、さらに家族、親族の「墓」関係資料の突き合わせの必要性を確認することができた。さらに、同じ墓誌銘資料一つをとっても、唐代と比べ宋代はより詳しい家庭状況や人的ネットワークが記される傾向にあり、「墓」関係資料は、人的ネットワーク解明や、宋代の社会史、文化史、経済史研究上のデータ収集の上で、有効な史料であることが明らかとなった。

第二は、上記の史料もしくは「墓」そのものがどのようなプロセス並びに社会的背景を以て作られるかについての解析を行った。研究代表者平田は、海外研究協力者のB.Bossler 及び水越知とともにこの問題について討論を重ね、次のようなプロセスが明らかになった。①女性の「貞節」や「孝行」などの徳義の行為（多くの場合、女性の死去を伴う）→②地元の士大夫、父老層などによる官府へ顕彰の訴え（中央政府は定期的に地方政府に孝子、列女の報告を求めており、地方

官府の上申はこれを受けて行われる）→③中央政府からの顕彰（具体的は牌防などの設置、税役の免除などを伴う。但し、税役の免除が本格化するのは次の元代以降であり、宋代においては、実例は少ない。また、列女の情報は史料として収集され、後の国史列女伝の材料となる）→④地方における祠廟や石碑の建設が行われる。こうした一連の動きに加え、特に南宋期以降、詩文や随筆などで列女顕彰の傾向が強くなって行く。これは「道学」の流行、元代頃から盛んになる列女顕彰に伴う免疫特権の獲得という問題に加え、南宋頃より顕著となる地方文化の高まりと深く関わっている。以上は列女をめぐる解析の成果であるが、地方志ならびに石刻史料の作成過程を検討した須江隆は、石刻資料作成自体が上記の列女とほぼ同じ①から④の過程をたどると共に、石刻資料の多くが地方志に収載されていく過程を通じて、北宋から南宋へと次第に地方の文化、風俗を書き残そうとする傾向の高まりを明らかにした。

第三は、「墓」資料を通して窺える人的ネットワークの解析を行った。その結果、中国社会は地縁、血縁、学縁、業縁といった多様な「縁」に基づく人的ネットワークをもとに構成されるといわれているが、宋代の「墓」史料はまさにこうした多様な「縁」を解き明かす上で格好なものであり、「墓」関係資料の解析を通じて、唐代から北宋、北宋から南宋へ社会が次第に「地方化」を強めるとともに、士大夫から庶民に至るまでの広範な文化を創り上げていく様子が浮き彫りとすることができた。具体的は、第一に、政治集団と地縁関係をめぐる問題がある。宋代史料の中で、読み解くのが難しい問題として「本貫（本籍地）」と現住所（居住地）との区別の問題がある。一族の定住、結集のプロセスの中で重要なものとして、一族の墓を何処に設定するのかという問題があり、一連の史料解析を通して、移動→定住→元の場所（本貫）より亡骸の移動、墓の設置（家廟、祠堂や墳寺の設置も伴う）→新たな本貫の社会的認知という流れを見ることができ、「墓」設置が地域社会でのアイデンティティ獲得の上で大きな意味を有する。また、首都開封を中心とした活動に重点が置かれた北宋士大夫に対して、南宋士大夫はそれぞれの地域に重点を置き活動を展開するようになる。このように、地域に対する意識の高まった南宋時代には「墓」の持つ意味がより強いものとなったと考えられる。墓誌銘、神道碑史料の解析を通しても、南宋期になると、同じ地域の文人に執筆を依頼するケースが増えており、地方化の傾向を見ることができる。さらに、「墓」関係資料を空間的に分析する試みも行った。連携研究者の岡元司は寧波に残る史氏一族の東銭湖の墓群を調査し、史氏一族の居住地、墓、墳寺（一族の菩提寺）の位置、並びに墓の石材の流通ルートを明らかにし、寧波という空間に於いて史氏一族が「墓」と深く関わりながらどのように勢力を形成していたかを明らかにした。

この他、連携研究者の中島楽章による日本に残された中国人墓地の研究、遠藤隆俊による墓の形成と宗族結集との問題についての研究（具体的には蘇州と洛陽の范氏についてのケーススタディ）、あるいは海外研究協力者の廖咸恵による墓地設置と深く関わる風水師、地理師と士大夫との交流の研究など、「墓」をキーワードとすることにより、従来の文献資料では見ることのできなかった宋代人の多様な生活や社会構造を窺うことができた。

これらの一連の成果についてまとまった成果報告書は刊行していないが、逐次、専門雑誌に公表を行っている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

①平田　茂樹、「宋代的政治空間：皇帝與臣僚交流方式的變化」、『基調與變奏：7-20 世紀的中國③』、台湾・國立政治大學歴史學系他、pp.171-202、2008 年、査読無し

②岡　元司、「宋代明州史師仲墓誌調査」、『広島東洋史学報』第 13 号、pp.94-98、2008 年、査読無し

③須江　隆、「宋～清時代の紙に写された碑文--紹興府城隍廟に関する史料群を中心に」、『人間科学研究』５，pp.379～349 2008 年、査読無し

④平田　茂樹、「宋代の政治空間を如何に読むか？」、『大阪市立大学東洋史論叢　別冊特集号　文献資料学の新たな可能性 3』,pp.219-243、2007 年、査読無し

⑤平田　茂樹、「宋代地方政治管見--箚子、帖、牒、申状を手掛かりとして」、『東北大学東洋史論集』11,pp.207-230、2007 年、査読無し

⑥遠藤　隆俊、「墳寺から祠堂へ--宋元士大夫の墳墓と祖先祭祀」、東北大学東洋史論集 11、 pp.55～82、 2007 年、査読無し

⑦平田　茂樹、「解読宋代的政治空間」、『中日学者論中国城市古代社会』、中国・三秦出版社、pp.107-127、2007 年 、査読無し

⑧平田　茂樹、「宋代の列女顕彰の構造--『宋史』列女伝を手掛かりとして」、『アジア遊学』91，pp.104-114、2006 年、査読無し

⑨須江　隆、「碑記に刻まれた反乱の風説--方臘伝説の成立と拡大」、『アジア遊学』91 (特集 碑石は語る)、pp.36～49、 2006 年、査読無し

⑩平田　茂樹、「従小説史料看宋代科挙社会的結合」、『科挙制的終結与科挙学的興起』、中国・華中師範大学出版社、pp.347-354、2006 年、査読無し

⑪平田　茂樹、「日本宋代政治研究的現状与課題」、『史学月刊』（中国、河南大学）308，pp.95-102，2006 年 、査読有り

⑫平田　茂樹、「宋代の日記史料から見た政治構造」、『宋代社会の空間とコミュニケーション』、汲古書院、pp.29-67、2006 年 、査読無し

⑬中島　楽章、「累世同居から宗族形成へ――宋代徽州の地域開発と同族結合――」、『宋代社会の空間とコミュニケーション』（汲古書院），pp.215-248、2006 年、査読無し

⑭平田　茂樹、「『欧陽修私記』から見た宋代の政治構造」、『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号、pp.95-110、2006 年、査読無し

⑮遠藤　隆俊、「成尋と義天－11 世紀東アジアの国際環境と入宋僧－」、『大阪市立大学東洋史論叢』別冊 pp.45-60、2006 年、査読無し

⑯平田　茂樹、「宋代政治構造研究所説」、『人文研究』57、pp.243-256、2006 年、査読有り

⑰平田　茂樹、「政治史料から読み解く宋代の都市空間」、『アジア遊学』７８，勉誠出版 pp.85-103、2005 年、査読無し

⑱岡　元司、「宋代における沿海周縁県の文化的成長－温州平陽県を事例として－」、『歴史評論』第 663 号、pp.2～11、2005 年、査読有り

⑲中島　楽章、「宋元明移行期をめぐって」、『中国――社会と文化』（中国社会文化学会），第 20 号，pp.482-500、2005 年、査読有り

〔学会発表〕（計 5 件）

①須江　隆、「記録された言説と信仰－寧波の地方志と碑文を中心に－」、国際シンポジウム「寧波とその周辺—地方文献に見える史

料性・地域性・歴史性—」、東京大学、2009年1月10日
②平田　茂樹、「如何解読宋代的政治空間」、“唐宋時期的文書伝遞与信息溝通”国際学術工作坊（中国・北京大学）、2007年９月28日
③平田　茂樹、「宋代の列女顕彰の構造—『宋史』列女伝を手掛かりとして—」、韓国・中国史学会、2007年9月９日
④中島　楽章、*Japanese Flour for Southeast Asian Saltpeter:Luzon-Kyushu Trade by Kato kiyomasa in the Late Six Sixteenth Century*, The Fifth International Convention of Asian Scholars（第５回 ICAS）、Kuala Lumpur Convention Center,Malaysia、2007年8月4日
⑤遠藤　隆俊、「宋代の宗族と移住伝説」、国際研究シンポジウム「中国の系譜と伝説」、大阪市立大学、2006年7月8日

〔図書〕（計3件）
①平田　茂樹・遠藤　隆俊・岡　元司共編『宋代社会的空間与交流』、中国・河南大学出版会、375頁、２００9年
②須江　隆主編『アジア遊学』91（碑石は語る）、勉誠出版、190頁、2006年
③平田　茂樹・遠藤　隆俊・岡　元司共編『宋代社会の空間とコミュニケーション』、汲古書院、410頁、２００６年

６．研究組織
(1)研究代表者
平田　茂樹（HIRATA　SHIGEKI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90228784

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
岡　元司（OKA　MOTOSHI）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10290777

須江　隆（SUE　TAKASHI）
日本大学・生物資源学部・准教授
研究者番号：90297797

遠藤　隆俊（ENDO　TAKATOSHI）
高知大学・教育学部・教授
研究者番号：00261561

中島　楽章（NAKAJIMA　GAKUSHO）
九州大学・大学院人文科学研究科・准教授
研究者番号：10332850

【海外研究協力者】
鄧　小南（DENG XIAONAN）
北京大学・歴史系・教授

劉 静貞(LIU JINGZHEN)
台湾・成功大学・歴史系・教授

廖 咸惠（LIAO XIANHUI）
台湾・暨南大学・歴史系・副教授

Beverly Bossler
UCデービス大学・歴史系・教授

翁 育瑄（WENG YUXUAN）
台湾・東海大学・歴史系・助理教授